

話し言葉における名詞文の 文末形式の使い分け

李明熙

◆要旨

目 本語の話し言葉における名詞文の文末は「デス形」「ダ形」「ゼロ形」の形式で終わることがある。この中で「デス形」と非「デス形」との区別は、従来の丁寧形と非丁寧形で説明できる。しかし、「ダ形」と「ゼロ形」は両方とも非丁寧形とされているだけで、両者の区別はあいまいなままである。本稿は両者の使い分けを論点とし、次のようなことを趣旨とする。「ダ形」や「ゼロ形」で終わる発話には、丁寧さのカテゴリ内の発話と丁寧さのカテゴリ外の発話がある。丁寧さのカテゴリ内の発話においては、「ゼロ形」で終わる名詞文は丁寧度が高くも低くもない普通体になるのに対して、「ダ形」で終わる名詞文は丁寧度が低く、聞き手に威圧感を与える。これを本稿では「威圧体」と呼ぶ。

◆キーワード

他者に向けた発話、自分自身に向けた発話、丁寧体、普通体、威圧体

◆ABSTRACT

The ends of noun sentence in Japanese spoken language can end by [desu] form, [da] form, and [ϕ] form. It can explain the distinction between [desu] form and non-[desu] form by a past, politeness and non-politeness. However, both [da] form and [ϕ] form are assumed to be non-politeness, the distinction of both is vague. In this paper, insists on the following. In the utterance that ends by [da] form and [ϕ] form, there are belonging to the politeness category and not belonging to the politeness category. In the politeness category, the noun sentence that ends by [ϕ] form is plain style that is not high the politeness degree and not low. And the noun sentence ends by [da] form is low the politeness degree.

◆KEY WORDS

Utterance for others, Utterance for oneself, Plain style, Polite style, "Iatsu" style

Distinction the Ends of Noun Sentence
in Japanese Spoken Language
Politeness degree of [desu] form,
[ϕ] form, and [da] form
LI MING-XI

1 はじめに

仁田 (1991) では、名詞文の文末形式は、聞き手存在の会話において、丁寧さを表す文法カテゴリの中で分化するとしている。しかし、名詞文の中で丁寧さという観点からだけでは説明できない部分がある。例えば、次の例では、学生が先生と話しているにもかかわらず、非丁寧形の「ダ形」を使っても失礼な発話にならない。

(1) (駅のホームに上がって、乗りたい電車が止まっているのが見えて)

学生：あっ、中央特快だ。乗りましょうか。

先生：本当だ。早く乗りましょう。

また、以下の例のような友人同士の会話の中で、名詞文の「ゼロ形」で終わるのは自然であるが、「デス形」「ダ形」で終わるのは不自然である(「？」は不自然であることを示す)。

(2) (友達にタバコを勧める場面で)

A：これ中国のタバコ {??です/??だ/φ}。吸ってみる？

B：ほんとに？じゃ、1本もらおう。

例文(2)は、話し手が既に把握している情報を友人に伝えることを目的とした発話であるため、丁寧さを考慮した発話である。この場合、従来の丁寧さの体系(「丁寧体：普通体」或いは「丁寧体：非丁寧体」)では、「デス形」が使われないことは説明できる。しかし、非丁寧体に用いられる「ダ形」が使われないことまでは説明できない。丁寧さのカテゴリにおける従来の体系の問題点は、「ダ形」と「ゼロ形」の区別があいまいであるということである。

本稿はまず、丁寧さと関わる発話と丁寧さと関わらない発話があることを示し、どのような名詞文が丁寧さのカテゴリ内の(つまり丁寧さと関わる)文で、どのような名詞文が丁寧さのカテゴリ外の(丁寧さと関わらない)文であるかを

明確にする。それから、丁寧さのカテゴリ内の発話において、「デス形」「ダ形」「ゼロ形」で終わる名詞文の位置づけを捉えなおして、上の例で挙げた現象を説明することを目的とする。また、本稿では文のスタイルと語形を分けて考える。普通体や丁寧体というのは文のスタイルの範疇で、普通形や丁寧形というのは語の形(フォーム)の範疇である。

本稿の立場を表で示すと、以下のようになる。

表1 名詞文の文末形式による丁寧度

	タイプ	デス名詞文	ゼロ名詞文	ダ名詞文
丁寧さのカテゴリ内の発話	伝達	丁寧体	普通体	威圧体
丁寧さのカテゴリ外の発話	放出		○	○

「○」は使用可能であることを表す。用語の定義は第2節と第3節で示す。なお、自分自身に向けた発話においては、ゼロ名詞文とダ名詞文両方が用いられ、その使い分けが問題になるが、今回は議論しない。

2 研究対象

本稿では、名詞文の文末形式の使い分けについて考察する第一歩として、「ダ形、デス形、ゼロ形で言い切る名詞文」が、「話し言葉」において、「平叙文」の形で用いられた場合の使い分けについて考察する。以下では便宜上、ダ形で言い切る名詞文を「ダ名詞文」、デス形で言い切る名詞文を「デス名詞文」、ゼロ形で言い切る名詞文を「ゼロ名詞文」と呼ぶことにする。このような名詞文は例えば、以下のようなものがある。

(3) 佐藤さん、こちらはマイク・ミラーさんです。〈デス名詞文〉

(『みんなの日本語 I』)

(4) (友達に) これ中国のタバコ。吸ってみる？ 〈ゼロ名詞文〉

(5) 警察だ。手を上げろ。 〈ダ名詞文〉

(6) (名前や年齢を確認する場面)

白河：年は？

上矢：24。

白河：やっぱ、じゃ、同じ学年だ。 〈ダ名詞文〉

(ドラマ『ブザー・ビート〜崖っぷちのヒーロー』)

(7) (教師が採点を間違えたことに気づいて)

えーと、田中さんは80点、山本さんは70点、おっとあぶない。山本さんは75点だ。

(3) (4) (5) は、知識を伝えることを目的とした発話、(6) (7) は、話し手の認識が更新されたことを表す発話である。このようなダ名詞文、ゼロ名詞文及びデス名詞文がどのように使い分けられているかが、本稿の論点である。

3 丁寧さのカテゴリ内の発話と丁寧さのカテゴリ外の発話の区別

デス名詞文、ゼロ名詞文、ダ名詞文の使い分けにあたって、まず丁寧さのカテゴリ内の発話であるかどうかを区別する必要がある。その理由は、例えば、以下の2例は同じダ名詞文であるが、適切性が異なるからである。

(8) (駅のホームに上がって、乗りたい電車が止まっているのが見えて)

学生：あっ、中央特快だ。 乗りましょうか。

先生：本当だ。早く乗りましょう。

(9) (電話で)

先生：乗ってるのが快速だったら、間に合わないと思うんだけど。

学生：私が乗ったのは中央特快 {です/*だ}。多分間に合うと思います。

この問題については、三枝 (2001) の「他者に向けた発話」と「自分自身に向けた発話」の区別が重要である。例 (8) は自分自身に向けた発話で、丁寧さのカテゴリ外の発話であるため、先生と話しているにもかかわらず、ダ名詞文が適切である。一方、例 (9) は、他者に向けた発話で、丁寧さのカテゴリ内の発話になり、先生に向けた発話であるため、ダ名詞文は不適切になる。

本稿では、話し手が既に把握している情報を、聞き手にその情報がないと想定して、その情報を聞き手に伝えることを目的とする発話行為を「伝達」と呼

ぶ。「デス」「ゼロ」「ダ」で言い切る名詞文はこのような機能をもっている。例えば、

(10) (会社の同僚を取引先の課長に紹介する場面で)

課長：おまたせしました。

社員：とんでもないです。同じ営業課の山本です。

(11) (居酒屋で佐藤が同僚の田中と友人の鈴木を紹介する場面)

佐藤：こいつが前から話している会社の同僚の田中。

田中：あっどうも、田中です。

鈴木：どうも。

(12) 警察だ。手を挙げろ。

以上の名詞文の内容は、話し手が自分にとっては既に把握している情報で、聞き手にとっては新しい情報であると話し手が想定しているものである。このような「伝達」の発話は、話し手が情報を聞き手のところまで届けるといった発話行為である。聞き手に届ける行為であるので、丁寧度が高いか低いかに関係なく、丁寧さは考慮されなければならない。

一方、話し手が聞き手に伝えることを目的としない発話がある。典型的なものに独り言が挙げられる。

(13) (教師が採点を間違えたことに気づいて)

えーと、田中さんは80点、山本さんは70点、おっとあぶない。山本さんは75点だ。

独り言は聞き手の存在を意識しない発話であるため、丁寧さを考慮しないことは当然のことである。このような独り言に加えて、以下の例文 (14) のように、聞き手が存在するにもかかわらず、下線部のような発話も丁寧さを考慮しない発話であるとする。

(14) (大学の先生と学生との1対1の会話)

学生：先生はいつイギリスから帰っていらっしゃったんですか？

先生：3月11日。

学生：地震の日だ。大丈夫だったんですか？

先生：いや、電車が止まって大変だったんだよ。

例文(14)の下線部の発話は、学生が「先生がイギリスから帰ってきた日が地震の起きた日である」という既知の情報を、先生が知らないと想定して、それを伝えることを目的として発したのではない。この名詞文による発話は、名詞文の内容を表すとともに、学生が先生の話を受けて、2つの日付が同じであることを認識したのは今(発話時)であることも同時に表す機能をもつ。

このように、話し手の認識になんらかの変化が起こり、それをその場で表す発話行為がある。このような発話行為では、話し手は話し手の認識になんらかの変化が起こったことを表すのみである。情報管理の観点からいうと、話し手は新規獲得情報を外に放出しっぱなしで、それが聞き手に届くかどうかまでは問題にしない。そのため、丁寧さは考慮する責任がなくなり、丁寧さのカテゴリ外の発話になる。また、その新規獲得情報を外に放出する目的は、話し手の認識において、新規獲得情報を事実として確認するところにある。その意味で、このような発話は自分自身に向けた発話であるといえる。この場合、話し手の放出した情報が聞き手に伝わるかどうかは、聞き手がその放出された情報をキャッチするかどうかによる。

丁寧さのカテゴリ外の発話の表現にはダ名詞文以外にもある^[註1]。このような発話行為を一括して、丁寧さのカテゴリ内の発話行為である「伝達」との対立概念として、「放出」とする。

- (15) a. 火事だー
- b. 地震だー
- c. 泥棒だー

尾上(2001)では、例文(15)のような名詞一語文を「《内容告知》一語文」

と呼んで、他者に伝える機能をもっていると述べている。結果的には他者に伝える機能をもっているが、注目されたいのは伝わるプロセスが「伝達」と異なるという点である。例文(15)は、話し手が名詞文の内容(火事であること/地震であること/泥棒であること)を誰かにキャッチしてほしい情報として放出し、聞き手に伝わるかどうかは聞き手が放出された情報をキャッチするかどうかによる(行動に移るかどうかは別問題)。これに対して、「伝達」は情報を聞き手のところまで届けるプロセスをとるため、いくら緊急状況であっても、以下のようにダ名詞文やゼロ名詞文は用いにくい。

(16) 119：もしもし

A：ここは××です。今ここ火事{です/??だ/??φ}。助けてください。

以上のことを表3のように整理できる。

表2 「伝達」と「放出」の区別

	「伝達」	「放出」
情報が話し手にとって	既存	新
情報が聞き手にとって	新	不問
聞き手に伝わるもの	名詞文の内容	名詞文の内容と発話時に話し手に認識されたこと
情報が伝わるプロセス	話し手 ^{届ける} →聞き手	話し手 ^{放出} → ^{キャッチ} ←(聞き手)

ここでいう、情報が話し手にとって「新」であるということは、ある出来事について改めて認識したことも含む。例えば、

(17) やっぱあいつが犯人だ。

この文で話し手にとって新である情報は「やはりあいつが犯人であること」であって、「あいつが犯人であること」ではない。何らかの手がかりで、前か

らもっていた「あいつが犯人であること」という情報に対する認識が改まった、ということ为例文(17)から読み取れる。

「伝達」の名詞文は、丁寧さの考慮が必須となり、その丁寧さを表す役割を「デス」「ダ」「 ϕ 」が担っている。次節でその使い分けを論じる。一方、自分自身に向けた発話である「放出」の名詞文は、丁寧さは考慮されないため、丁寧さを表す要素は出現しない。このとき、ダ名詞文とゼロ名詞文が使われるが、その中の「ダ」「 ϕ 」は丁寧さを表さない点で「伝達」の名詞文の「ダ」「 ϕ 」と異なる。その使い分けは別の要因によるが、これに関しては別の機会に論じることにする。

4 丁寧さのカテゴリ内の問題

丁寧さを表すカテゴリの研究では、丁寧体：非丁寧体、或いは、丁寧体：普通体、というふうに二項対立をなしているとするものが多い。しかし、このような二項対立の観点から名詞文の丁寧さを説明するとき、若干の問題がある。例えば、以下の例文(18)(19)は両方とも丁寧さを考慮した他者に向けた発話であるが、以下の2つの問題が説明できない。

1つは、次の例文(18)のように、ゼロ名詞文とダ名詞文を両方とも普通体(非丁寧体)だとすると、なぜゼロ名詞文は適切であるのに対して、ダ名詞文は適切ではないかが説明できない^[注2]。

(18) (友達にタバコを勧める場面で)

A : これ中国のタバコ { ϕ / ?だ}。吸ってみる？

B : ほんとに、じゃ、1本もらおう。

もう1つの問題は、「普通体」(或いは「非丁寧体」)と「丁寧体」の対立では、以下の例文(17)のように、普通体(非丁寧体)であるのに、なぜゼロ名詞文ではなく、ダ名詞文が使われるのかが説明できない。

(19) (上司の刑事が部下に紙を渡したあと)

部下 : なんですか、これ？

上司 : お前が騒いでいた大きな取引の場所と時間だ。ま、ほかに人員は出せんが、それで気がすむんだったら、行って来い。

これらの問題に関して、荘司(1992)の指摘が有効である。荘司(1992)では、「丁寧体」の「です」に対応する普通体は、「だ」ではなく、「だ」を削除した形、すなわちゼロ形であると指摘している。また、三枝(2001)では、「ダ名詞文が他者に向けた発話として用いられる場合は、男性だけが用いる」と述べ、他者目当ての発話の用法に「主張、強調」「命令」などの用法が挙げられているが、これは、ダ形がゼロ形よりも丁寧さが低いということを意味している。飯島(1981)では、「ダ」は、意味的には、話者の判断、話者の叙述視点の固定、さらに不審や軽蔑の念を示す」と指摘されている。

本稿では、荘司(1992)、三枝(2001)、飯島(1981)の考えを引きついで、会話文における言い切り名詞文の普通体は「ゼロ形」を用いるとし、「ゼロ形」に「ダ」がつくと、丁寧さが下がると考える。つまり、丁寧さのカテゴリ内の発話で、デス名詞文は丁寧さを上げる丁寧体、ゼロ名詞文は丁寧さを上げることも下げることもしない普通体、ダ名詞文は丁寧さを下げると考える。そして、丁寧さを下げる文体を議論の便宜上「威圧体」と名づける。

要するに、丁寧さのカテゴリにおいて名詞文は、「丁寧体」と「普通体」というふうに、二項対立をなしているのではなく、「丁寧体」「普通体」「威圧体」というふうに三項対立をなしていると考えられる。図で示すと、以下の図1のようになる。

名詞文の丁寧体には「デス形」と「デゴザイマス形」があるが、「デゴザイマス形」は「デス形」よりさらに丁寧度が高いと考えればよいので、ここでは

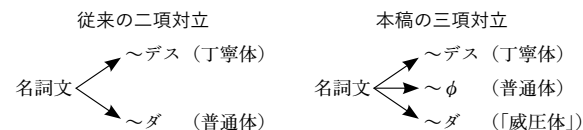


図1 名詞文の丁寧さのカテゴリ

デス名詞文のみ取り上げる。

このように、名詞文の丁寧さのカテゴリが「デス形」の「丁寧体」、「ゼロ形」の「普通体」、「ダ形」の「威圧体」というふうに三項対立を形成するとすれば、上に挙げた2つの問題に答えることができる。

まず、1つ目に、前出の例文(18)で、ダ名詞文が不適切なのは以下の理由による。友人関係では、丁寧さを上げることもなく下げることもない普通体が使われるのが適切である。ここで、威圧体であるダ名詞文を使うと、丁寧さが下がってしまうので、不適切になる。

2つ目に、例文(19)で、ゼロ名詞文ではなくダ名詞文が使われるのは、話し手が上の目線で自分が上位であることを明示的に示すためである。この機能を果たすのに、丁寧さが低い威圧体のダ名詞文が適切である。ゼロ名詞文は丁寧さを下げて威圧感を感じさせる効果がないので、使われなかったということになる。

例文(19)のような発話は、刑事ドラマやヤクザ映画などではよく現れるが、普段の日常生活ではさほど使われないようである^[註3]。実生活で使われるとしたら、どの状況で使われるか、性差・世代差があるかどうかなどが問題になるが、調査する必要がある。しかし、伝達のダ名詞文の使用において、仮に性差が出たとしても、それはダ名詞文の丁寧度が低いことが原因であると考えられる。

5 日本語教育上の問題

日本語教育では、他者に向けた発話と自分自身に向けた発話を区別せずに、名詞文の普通体を導入することが多い。そのため、学習者は次のような不自然な名詞文を作ってしまうがちである。(話し言葉と書き言葉とは文の性質が異なるとしたら、メールは話し言葉の性質に近いとみなす。)

(20) (イギリス人学習者の友達からのメール)

…ちなみに、中国の旅は主に上海、杭州、西安と北京に行く予定だ。
もし李さんはお勧めの場所があったら、教えてください！

下線部のところは「ゼロ形」で終わるのが適切である。このような文を作った学習者はおそらく以下の2つの原則に従ったと考えられる。

- a. 友達同士は普通体を使う。
- b. 「です」の普通体は「だ」である。

問題はbである。日本語教育では丁寧形と普通形に分けて、丁寧形が「デス形」、普通形が「ダ形」であると取り上げることが多い。以下では、日本語教科書『みんなの日本語』を例に挙げる。

『みんなの日本語 初級I本冊』の第20課で丁寧形と普通形が導入されているが、練習Aの1では以下の表4で整理されている。(「…」は省略部分。下線は筆者が加えた)

表3 『みんなの日本語 初級I本冊』第20課

ていせいけい 丁寧形	ふつうけい 普通形
あめです	あめだ
あめじゃ ありません	あめじゃ ない
…	…

表4から分かるように、名詞文の普通形を「ダ形」であると提示している。そして、「ゼロ形」は取り上げられていない。『みんなの日本語』の第20課の導入部の文型と練習Aの2では、以下の例文が挙がっている。

- (21) きょうは 僕の 誕生日だ。
- (22) わたしは サラリーマンだ。

例文(21)のダ名詞文は、他人に自分の誕生日を教える発話としては極めて不自然である。しかし、自分の誕生日を忘れていた状態で、カレンダーを見てはじめて今日が自分の誕生日であることに気づいた場面では、この発話は自然である。つまり、例文(21)のようなダ名詞文は、他者に向けた発話としては

不適切であるが、自分自身に向けた発話としては自然である。『みんなの日本語』ではこれを考えて導入しているとは思われない。練習問題に次の例が挙げられている。

(23) あの人はいもう結婚している？

……ううん、独身だ。

『みんなの日本語』のように、「ダ形」で終わる名詞文を普通体で導入する日本語教科書として、『新日本語の基礎 I』（スリーエーネットワーク）、『文化初級日本語』（凡人社）、『進学する人のための日本語初級』（国際学友会）、『ジェイ・ブリッジ』（凡人社）、『中級の日本語』（The Japan Times）が挙げられる。

また、「～と思います」に前接する文の作成を目的で、「ダ形」を普通形として導入する教科書として『日本語初級1大地』スリーエーネットワーク、『日本語中級J301』スリーエーネットワーク、『日本語中級J501』スリーエーネットワーク、『初級 語学留学生のための日本語【I】』凡人社、『中級から上級への日本語』The Japan Timesが挙げられる。

普通体は文のスタイルの範疇で、普通形は語の形（フォーム）の範疇である。しかし、普通体との区別を明示的に提示している教科書は少ない。

日本語教育ではこのようにダ名詞文を導入しているため、学習者は例文(20)のような文を作りがちである。本稿のように、他者に向けた発話と自分自身に向けた発話に分け、他者に向けた発話においては、ダ名詞文は威圧体になることを明示することにより、例文(20)のような誤用は避けられると考えられる。

6 まとめ

本稿では、名詞述語文の文末形式の使い分けを説明する際に、以下の仮説を立てる必要があることを述べた。

i. 他者に向けた発話と自分自身に向けた発話に分けて考える必要がある。

- ii. 他者に向けた発話における丁寧さを説明するとき、丁寧体と普通体のほかに威圧体を立てると有益である。「デス」で言い切る名詞文は丁寧体、「ゼロ」で言い切る名詞文は普通体、「ダ」で終わる名詞文は威圧体に位置づけられる。
- iii. 普通形と普通体の区別を明示する必要がある。
- iv. 以上のことを踏まえ、日本語教育において、名詞文の普通形と普通体を導入する必要がある。

以上、最もシンプルな名詞文すなわち、「名詞＋{デス／ダ／φ}」で言い切る名詞文の使い分けについて丁寧さの観点から述べた。これらの後ろに終助詞「よ、ね、よね」などがつくと、男女差や世代差の問題が出てくる。また、「ダ＋{よ／ね／よね}」は丁寧さが下がらない。これらの現象に対する説明は今後の課題にしたい。

〈一橋大学大学院生〉

注

[注1] …… 以下の名詞文、動詞文、形容詞文も丁寧さを考慮しない発話である。

ゆうこたちと手をつないで歩く哲夫。 (坪本 1997)

神谷は一気にビールを飲んで「ああ、うまい…」 (仁田 1997)

私は帰ろう。 (森山 1997)

(赤ん坊を見ていたところ、たまたま赤ん坊が笑い出した)

あ、笑った。 (井上 2001)

あ、サイドブレーキかかっている。 (定延 2010)

なんてうつくしいんだろう！ (安達 2002)

[注2] …… もっとも、例文(16)で「これ中国のタバコなんだ」のようにノダ文にする問題がないが、本稿では最もシンプルな名詞文「名詞＋{デス／ダ／φ}」の文法的現象を観察することにする。

[注3] …… このことから、伝達のダ名詞文は役割語の性質を帯びるが、その役割語の成立の根拠としても本稿の丁寧さの三項対立が必要であると考えられる。

参考文献

安達太郎 (2002) 「現代日本語の感嘆文をめぐって」『広島女子大学国際文化学部紀要』10, pp.107-121. 県立広島女子大学国際文化学部

- 飯島周 (1981) 「日本語における終結詞「ダ」の機能について」『跡見学園女子大学紀要』第14号, pp.230-219. 跡見学園女子大学
- 井上優 (2001) 「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について」つくば言語文化フォーラム (編) 『「た」の言語学』 pp.97-159. ひつじ書房
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』くろしお出版
- 三枝令子 (2001) 「「だ」が使われたとき」『一橋大学留学生センター紀要』4, pp.3-17. 一橋大学留学生センター
- 定延利之 (2010) 「「た」発話を行う権利」『日本語／日本語教育研究』1, pp.3-30. ココ出版
- 荘司育子 (1992) 「疑問文の成立に関する一考察—「デス」という形式をめぐって」『日本語・日本文化研究』2, pp.39-50. 大阪外国語大学日本語学科
- 坪本篤朗 (1997) 「文のタイプと日本語「ト書き」連鎖」『人文論集 静岡大学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告』48(1), pp.A311-A324. 静岡大学人文学部
- 仁田義雄 (1991) 「言表態度の要素としての〈丁寧さ〉」『日本語学』10(2), pp.65-75.
- 仁田義雄 (1997) 「未展開文をめぐって」川端善明・仁田義雄 (編) 『日本語文法 体系と方法』 pp.1-24. ひつじ書房
- 野田尚史 (1994) 「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『國語學』194, pp.102-89. 国語学会
- 森山卓郎 (1997) 「「独り言」をめぐって」川端善明・仁田義雄 (編) 『日本語文法 体系と方法』 pp.173-188. ひつじ書房

【用例出典】

『みんなの日本語 初級I 本冊』スリーエーネットワーク

『ブザー・ビート～崖っぷちのヒーロー～』フジテレビ 脚本：大森美香